



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 FAX 03-3661-6241
 振替東京 00100-0-93487
 編集兼発行人 佐藤宗丕

会員章



平成八年度

慰霊祭 総会 直会

晝 間 志 津 子

平成八年三月三十一日(日)前夜の
 大嵐に当日はどうなる事かと気にしな
 がら、一応天気予報を信じ床に就きま
 した。五時起きして窓を開ければ、一
 片の雲もなく空はうす茜色、思わず
 「良かった」。気持はもう会員の方々の
 来られる様子を思い浮かべました。

八時集合の約束に、着いた社頭は昨
 夜の雨に清められまだ人影もまばら。
 桜の蕾は今日、開花を宣言されそうな
 ピンク色を覗かせて愛らしく、私は思
 わず顔を綻ばせました。

九時受付開始前から早やばやと来ら
 れた会員の皆様、思うところは一つ、
 此の思いがあればこそ今日まで会を続
 けてこられました。いいえこれからも
 いつまでも続いてゆくであろう事を強
 く感じました。

十時、拜殿で修祓を受け御本殿に昇

り献饌、祭主祝詞奏上、佐藤会長の祭
 文奏上に当時に思いを馳せてか、すず
 り泣く背に胸を衝かれました。

続いで玉串奉奠は、佐藤会長、栗
 林顧問、大給相談役、来賓の田村倉由
 様、会友の平林和夫様、妻の谷沢英子
 様、姉の馬場常様、弟の山田正三様、
 子の島崎正猪様、孫の佐藤加久也様が
 それぞれの代表となり、一同これに合
 わせて拍手、拝礼。その胸に彷彿する、
 大切なものを抱いて静かに御本殿を退
 下しました。

御神酒と御神饌を頂戴し、靖国会館
 前で記念の写真を撮り、十一時三十分
 から同会館二階大会議場で定期総会と
 なり、内海幹事の司会で晝間常任幹事
 を議長に選び議事に入りました。

会長挨拶の後、会務報告、続いて黒
 川常任幹事から別掲のとおり決算報告、



目 次

平成八年度 慰霊祭 総会 直会
 晝間志津子 1
 厚生省委託 日本遺族会主催
 戦没者の遺児による
 慰霊友好親善事業 2
 来年の慰霊祭は4月5日です 2
 慰霊祭にお参りして
 平林 和夫 2
 鎮魂 ウオツゼ島 篠崎 英夫 5
 夏 雲 平林 和夫 6
 押し花 北原ひで子 8
 クエゼリンに散華した兄
 黒川 正文 9
 「第七五二海軍航空隊の航跡」
 を読んで 長谷川栄次 10
 ナウル島からピエズ島へ
 神西 義信 10
 お頼りの中から 日向野キク 11
 靖國神社だより 12
 高松宮殿下 硫黄島へ
 阿川 弘之 12
 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式 13
 緑(えにし) 鎌田いね子 14
 名簿訂正 14
 鎮魂50年誌「南十字星」刊行 15
 寄付者芳名 15
 本部便り 16
 異 動 16
 訂 正 16

高橋監事から監査報告、次に会長から
会務計画と予算案が説明されました。
更に、今年には本会も厚生省も現地慰靈
の計画はないが、日本遺族会の「戦没
者遺児による友好親善事業」の中に、
マーシャル、ギルバート諸島への慰靈

巡拝があるので、参加希望者は至急申
込まれるようにと話されました。
更に、小グループで現地行きを希望
する場合はできる限りお手伝いをさせ
て頂くとのことでした。

以上すべての案件は承認されて、議
事を終り、会長から、平成三年以来四
年半の間ボランティアとして協力され
た佐久間フミ子さんが昨年末を以って
やめられ、今年一月から水野三佐子さ
んが奉仕していると紹介されました。

続いて来賓の中政会の田村倉由様に
よる貴重な現地での体験談等有意義な
お話を頂き感銘いたしました。

総会を終えて希望者一二人名による
直会となり、黒川常任幹事の司会で、
会長挨拶、そして石川正興様から会の
ますますの発展と会員の健康を祈念し
て乾杯の発声。

奉納芸能は昨年に続き名倉先生外の
錦正流大正琴と、赤城流家元赤城輝實
扇社中の方々による日本舞踊で、遠い
昔を思い出させるメロディーの数々で
熱演して下さいました。

そのあと、神奈川県志田富雄様
（号富岳）が「九段の桜」を朗々と吟
じ桜の候のお祈りは一層盛り上りまし

た。会員一同は英霊と共に一堂に集い、
ひと時を楽しみ、和氣藹藹のうち三時
解散となりました。

お天気にも恵まれ最高の慰靈祭が行
われたことに幸せを感じました。

厚生省委託 日本遺族会主催
戦没者の遺児による
慰霊友好親善事業

1 巡拝地域
マーシャル諸島班（マジユロ、マロ
エラツプ、ウオツゼ、ルオット、クエ
ゼリン）
ギルバート諸島班（マジユロ、マキ
ン、タラワ）

2 時期 平成八年十月十七日（木）一
十月二十六日（土）九泊十日

3 人員 各班とも十五人

4 申込 八年八月十五日

5 申込先 参加者が居住する都道府県
遺族会（連合会）

6 経費 参加者負担一〇万円

☆参加を申込みされた方は本部にお知ら
せ下さい。

来年度の慰靈祭は
四月五日（土）です

平成九年の定例慰靈祭は桜の好季節
四月五日（土）に靖國神社で行います。
定時総会直会などについても明年二月
発行の「環礁」でお知らせします。

慰靈祭にお参りして
京都府 会友 平林 和夫

私は今年マーシャル方面遺族会の、
慰靈祭・総会・直会に、初めて上らせ
て頂きました。

これまで心ならずも、ようお参り出
来ませんでした。今回は終戦五十年
の区切りの年度でもあり、早くから心
に決めていたのです。

私は、遺族会の奨めで入った靖國神
社奉賛会のバッヂをつけ、戦友らの
御霊に会える思いで、前日丹後を出発、
予約の宿九段会館に行きました。

宿では、同じお参りの方々と同室で
したが、初対面ながら忽ち打ち解けて、
思いのままに、戦地での様子・古里の
話が、時を忘れてはすみませんでした。遺族
会なればこそ、と深く感じられたこと
でした。

(二)
さて一夜明けて慰靈祭当日になりま
した。私はこの朝、特に早く起き出て、
齋戒沐浴し衣を更めて、時間早く神社
に向いました。空は日本晴れ桜は咲き
始め、御霊の思召しかくやと思わされ
ました。銅像に鳩が沢山とまっている
のが印象的でした。

大勢の遺族の方が、続々と受付に寄
られました。（あとで伺ったものでは参
加の方は二〇九名とのこと）私は参集

所応接室で、佐藤会長様始め、顧問栗
林徳五郎様、相談役大給湛子様、篤志
会員松平永芳様、来賓田村倉由様他多
くの方々にお目にかかれて、光栄に存
じました。

応接室に数多くの立派な花嫁人形が、
記名の祭神宛に、各々の遺族から捧げ
られてあって、何とも心に沁むること
でした。

いよいよ昇殿参拝のときが来ました。
私は正式に昇殿参拝させて頂くのは、
初めてでした。心は緊張し身は強張っ
て来ました。

一同は定刻十時、みたらしで心身を
清め、拜殿に正座して、お祓いを受け、
心静かに回廊を渡って、ご本殿に上り
ました。

何よりも私らが感動したのは、祭主
の祝詞奏上と会長の祭文奏上でした。
私は心を澄まし、必死の思いで、二つ
の奏上に聞き入りました。祝詞は私ら
によくわかるように、特に配慮されて
いて、ほほその意味を拝することが出
来たし、祭文は戦友と遺族の心そのま
まであって、私らは、若き靖國の命ら
が、特に私と同じ島で果てた戦友らが、
ここにきて、一緒に聞いている幻を覚
えました。涙が湧き、私はハンカチで
押えながら、切に切に、御霊ご安永を
祈りました。今はただ祈りがあるだけ
でございます。

尚私は玉串奉奠のご奉仕をさせて頂
けて、感銘の上はありませんでした。

(三)

慰霊祭が感動のうちに終り、そのあと靖国会館で、総会と直会が持たれました。初めて参加の私は、総会の様子直会の運びもさることながら、こまめで続けて下さった会長様始め役員の方に、更めて敬意と感謝の念いを強うし、この会がこれからも永く、護持継承されねばならぬことを思いました。

直会で大正琴の海軍の歌、舞踊の九段の母には、又しても涙ぐまされました。私は、私が出たことのあるルオット島の、第十四魚雷調整班の遺族の方に、お話をさせて頂くことが出来て、「来た甲斐があった」思いが致しました。そのあと遊就館をゆっくり細かく拝観し、思い出の深い参拝の一日を終りました。

この会が永く継承されることと、新しいマーシャル諸島共和国が、平和と繁栄に包まれることを、お祈りするものであります。(8・4・20)

身を清め衣更む老兵われの
今靖國に昇殿正座す

既に神となりたる戦友の並び顕ち
奏上祝詞共に聞くかと

銅像の頭に肩に刀柄に
鳩止まりいて杜の朝明く

靖國の杜に特攻回天の
一機を置きて桜咲き初ひ

靖國の若き命に遺族らが
捧げし花嫁人形のあまた

第32期決算報告書 (自平成7年1月1日 至平成7年12月31日)

第33期一般会計予算

マーシャル方面遺族会

(自平成8年1月1日 至平成8年12月31日)

1 一般会計収支計算書

2 一般会計財産目録 (平成7年12月31日現在)

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	7,250,101
会 費	1,203,000
寄 付 金 等	1,636,732
受 取 利 息	2,490,085
雑 収 入	246,045
(小 計)	(5,575,862)
合 計	12,825,963

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
現 金	5,408		
普通預金	605,856		
郵便振替	49,520		
通知預金	300,000		
金銭信託	2,166,495		
定期預金	1,900,000	次期へ繰越	5,027,279
合 計	5,027,279	合 計	5,027,279

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	5,027,279
会 費	1,100,000
寄 付 金 等	1,500,000
受 取 利 息	200,000
雑 収 入	100,000
(小 計)	(2,900,000)
合 計	7,927,279

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	334,482
運 営 費	526,600
事 務 所 費	600,000
広 報 費	682,866
印 刷 費	52,530
刊 行 費	4,855,595
通 信 費	179,483
消 耗 品 費	9,711
会 議 費	119,439
送 金 諸 費	32,840
公 租 公 課	368,164
雑 費	36,974
(小 計)	(7,798,684)
次 期 へ 繰 越	5,027,279
合 計	12,825,963

3 特別会計 (現地慰霊碑維持基金勘定)

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前期より繰越	7,500,000		
		次期へ繰越	7,500,000
合 計	7,500,000	合 計	7,500,000

(注) 定額貯金及び貸付信託として保管。

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

平成8年2月7日

監 事 高 橋 鎮 夫 ㊟

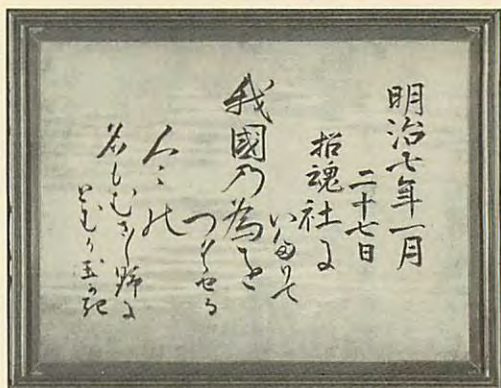
同 佐 竹 エ ス ㊟

会 長 佐 藤 宗 丕 ㊟

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	500,000
運 営 費	500,000
事 務 所 費	600,000
広 報 費	700,000
印 刷 費	10,000
通 信 費	200,000
消 耗 品 費	80,000
会 議 費	150,000
送 金 諸 費	30,000
公 租 公 課	40,000
雑 費	30,000
(小 計)	(2,840,000)
次 期 へ 繰 越	5,087,279
合 計	7,927,279

御製



明治天皇御製

明治七年一月二十七日 招魂社にいたりて

我が國の爲をつくせる人々の

名も武蔵野に

とむる玉垣

明治天皇が初めて靖國神社に詣でられた御歳二十二歳のときの御宸筆御製で、靖國神社御本殿上壇の間に掲げられている。

慰霊祭参列者芳名

(敬称略、順不同)

今年三月三十一日(日)の慰霊祭に次の皆様が参列されました。参列しても受付で手続きをしなかった方は掲載できません。参列された方は二〇九名ですが、氏名のわからない方が三名ありました。

顧問 栗林徳五郎 相談役 大給湛子

篤志会員 松平 永芳

来賓 田村 倉田(中政会)

岩手県 小杉 サヨ 細川 ヨキ

吉田 サク

秋田県 奥山 キノ

山形県 長岡 仙一

宮城県 松木 孝子

福島県 鈴木ヨシエ 富田 ミツ

富田 キミ

茨城県 安藤 啓次 安藤 やす

北條 勝成 佐藤 常子 佐藤 恭孝

栃木県 菊地 彦亘

群馬県 日向野キク

埼玉県 井沢 なを 原木 和枝

小沢 セツ 小野 リエ 小野 博孝

北原ひで子 近藤マスエ 小室 洋子

櫻井 かね 小野塚君子 小野塚貞夫

鎌田 淳 野田 雅子 柴田 貞子

菅野 久雄 菅野つね子 千田 恒子

服部 陽一 藤田 清瀬 天野 好子

山下 みつ

千葉県 石川 きみ 岩佐 とみ

豊谷 秀光 豊谷美恵子 芳賀タツエ

堀口 太平 宮本 豊吉 谷沢 英子 佐藤 隆一 佐藤 章子 佐藤加久也

谷沢由紀子 東京 都 会田 くに 青木 利一 志田 富雄 志田 澄子 穴戸猷吉郎

秋元輝夫 荒木 常子 佐久間フミ子 谷 達也 西森サツキ 橋田 正幸

石川 勲 石谷 典夫 内海 淑子 服部 純昌 松江 正子 安威 和子

遠藤 安男 大山美穂子 押谷 義雄 新 潟 県 新保 晃 藤田美枝子

大野 清子 加藤 照 片岡 良子 藤田 正勝 山田 正三 山田キヨエ

片岡 正人 黒川 誠 黒川 直吉 米田 豊治

鎌田 いね 小島八重子 小林 法子 富山 県 棚橋 昭二 村梶 光栄

小山キミ子 佐藤 宗丕 佐藤 ナヲ 福井 県 田賀 将一 田賀 朋子

佐竹 エス 齋藤耕太郎 齊藤 孝平 田賀 英子 田賀 奨 田賀 護

齊藤 英美 坂本美枝子 篠崎 英夫 田賀 茜 坪内 一枝 坪内くみ子

島崎 正猪 白井まさ子 白井 勝年 畑下ふよ子 齊藤みよ子

白井小夜子 白井 正恵 菅谷喜代子 山 梨 県 黒川 正文 山田 二美

菅沼 昇 鈴木つな子 田中 猛 長 野 県 伊藤ますの 坪井恵美子

高橋 鎮夫 高林 芳夫 瀧 知道 青木 経子 坪井恵美子 吉田 正明

瀧 崇江 谷梯 初江 佃 喜美 岐 阜 県 吉田 綾 吉田 正明

出口 スエ 出口 洋子 長岡ふじえ 吉田 礼子 服部くにゑ

中村 順子 西沢 和子 長谷川智子 静岡 県 服部くにゑ 山下 治

蓮沼 常子 蓮沼 一栄 浜田つき子 愛 知 県 浜田 芳枝 山下 治

番場 信子 晝間 樂平 晝間志津子 京 都 府 平林 和夫 栗山 美子

鈴木喜久子 森田 穰二 望月とよ子 奈 良 県 山中 美子 栗山 美子

山口 裕子 山口 良二 山森 久江 広 島 県 奥井 礼子 安田 義行

柳沢 正雄 渡辺 妙子 渡辺 勇 安田房子 佐々木千鶴子 佐々木文也

水野三佐子 神奈川 県 赤坂 スズ 石渡 綾子 溝口ハナコ 溝口 幸代 石川 正興

能勢 澄子 石沢 洋子 石沢 春男 香川 県 秋山百合子 石川 正美

岩瀬 三樹三郎 岩瀬 純子 眞鍋 信一 石川 妙子 眞鍋 公代 眞鍋 正美

及川佐和子 及川 経子 及川 福子 愛 媛 県 兵頭 義彦 松友 公子

平田 賢二 平田 義江 平田 知之 高 知 県 馬場 常 鐘ヶ江敬介

岩田とし子 片桐 温子 内藤 つる 福 岡 県 鐘ヶ江敬介 草場 マキ 草場 寛

鯛尾 房江 内山 浅子 岡野 正文 佐 賀 県 草場 マキ 草場 寛

片山 計 栗田千代子 佐藤 登志 鹿 児 島 県 村上 義博 村上ヨシエ

鎮魂 ウオツゼ島

―第五三一海軍航空隊の航跡―

会友 篠崎英夫

氷雪の北千島から赤道直下のマーシャル群島まで天翔り昇華された二〇六柱の御霊安かれとお祈りいたします。

第五三一海軍航空隊歴

第五三一海軍航空隊は、昭和十八年七月一日天山一型艦上攻撃機三六機及び輸送機一機をもって、館山海軍航空隊内において編成され、同年九月北千島方面に展開した。

同年十一月下旬ギルバート諸島マキン、タラワ方面玉砕による航空戦力増強のため、館山及び北千島の掃鉢、片岡両基地に派遣隊を残して本隊はマーシャル群島ウオツゼ島に進出、同方面の作戦に従事して輝かしい戦果を収めた。

翌十九年一月下旬、米機動部隊との戦いにおいて、全飛行機を失い搭乗員は全滅、同年二月二十日をもって解隊されウオツゼ基地隊員は、全員第四艦隊司令部付あるいは第六十四警備隊付となる。以後同島にて米軍の絶え間ない攻撃と想像を絶する生き地獄さながらの餓戦との闘いのうちに、二十年八月終戦を迎え同年十一月、生存者五八名全員空母鳳翔にて帰国した。

戦死、戦病死者 二〇六名

第五三一海軍航空隊戦歿者芳名

1 昭和十八年八月十二日 館山基地にて訓練中事故により 一名

合田邦男

2 昭和十八年十一月十二日 北千島基地にて事故により 一名

玉田政一

3 昭和十八年十二月五日 マーシャル諸島沖航空戦にて 一八名

松崎三男

馬場将尋

小吹庄次郎

児子 力

池田政雄

山本二郎

4 昭和十八年十二月十六日 ウオツゼ着陸時、米飛行機の銃弾により 一名

山元良男

5 昭和十八年十二月十九日 マーシャル方面第三次進出作戦において 一名

大串秀雄

山根照登

明石只男

坂口 昇

6 昭和十八年十二月二十五日 マキン島攻撃にて 六名

嶋光太郎

召田俊夫

7 昭和十九年一月六日 用務を帯びトラック島へ出張中、同地にて 一名

田中四郎

8 昭和十九年一月十九日 横浜・サイパン間にて空輸、哨戒中の八〇二空飛行艇に便乗中 一名 田中 明

9 昭和十九年一月三十日 マーシャル方面進攻の米機動部隊との戦闘にて 一八名

東島富士夫 宮川洵治 山田 正 南 信雄 世古波平

遠間万喜太 桜井七男 二十日以降 一名 黒田清一

用務を帯びト 伴野敏夫 三月 一名

同地にて 一名 四月 二名 岡本 彰 坪井 栄

五月 二名 高島昭男 上田清一

六月 四名 宮本秀松 高見 実 白川昭次

七月 三名 鋤柄八郎

八月 一三名 瀬並健一 中本幹夫 三好武士

九月 一〇名 山野政吉郎 國島勇雄 松林英夫

二又重男 福西昌和 池田好美

川原真佐美 但木甚助 中島静夫

安福敏郎 飛田実美 井上康三

廣野忠雄 十月 七名 中山 肇 中林正行 大熊金吾

谷口実治 松田喜右エ門 藤井演乘

小林惣次 十一月 一名 棚橋光雄 山岸英雄 奥村孫一

前田守一 井垣一郎 宗本義男

寺田卯三郎 長田正次 寺本初一

十二月 八名 村瀬藤雄 劍持詠造 栗山厚美

山室 勉 仲倉一郎

窪谷明朗 横山庄八郎 川村善吉 征矢博門 藪本弘藏 沼田安正 山田 馨

大久保秀雄 逸見春雄 井勢吉雄 宮本啓一 相馬秀肆 花房清之

鷺坂弥十 福富勝造 塚本喜代次 宮島一男 田角八郎 松本 実

甲賀正二 神田幸雄 岡 芳美 井上三男

藤森初雄 松尾武登 杉田 昇

10 昭和十九年二月六日 マーシャル方面残留搭乗員の收容作戦において 三〇名

井上英男 赤坂好悦 久代 博

矢島 哲 長瀬兵衛 山崎啓三

浜崎純利 森 資隆 吉岡道雄

鹿野内正一 田沢喜一 高木 修

坂手大繁 小林政信 荻原重典

小田 博 高嶋隆行 野田 勝

樋口弘良 幸田 卓 田代金六

安田善樹 中村佐美 鈴木鋼作

米沢 幹 諏訪泰敏 増田謹次

寺尾辰三郎 金子正雄 三輪清造

福元十太郎 松井竜平
・昭和二十年一月 一三名

石崎信夫 石塚重道 市川義信

神谷 正 横山光宏 中川静也

井上信二 大林逸郎 橋 良市

吉原 一 堀江良作 中村松治

宮島喜代三

・二月 一九名

石川秀吉 寺内 求 高橋定雄

下地広助 中川福雄 欽田 清

中津義一 梨本啓三 横山 栄

山本久男 牧村義之 宮田 勇

藤本亀雄 近藤 清 柴田茂則

竹下清市 山本安雄 安 山平

山根 昇

・三月 七名

知野寅男 有木 茂 安田 徹

宮田貞信 村田耕一 上倉正夫

平井 芳政

・四月 四名

福島達之助 赤木逸治 伊藤 茂

住岡昭三郎

・五月 二名 志水富夫 大林喜太郎

・六月 一名 長岡三友

・七月 六名

勝又武平 相本正造 西 秀夫

田中 修 岡野元次 黄倉与吉

・八月 一名 江口三郎

(筆者は元第五三二海軍航空隊主計長

〒162 東京都新宿区市ヶ谷薬王寺町

三〇一六〇八)

夏 雲

ある孤島基地の終戦記

会友 平 林 和 夫

(元二五二空主計長)

(一)

それは、静かな東雲であつた。渺たる大洋の直中、小さな環礁が一つそのうちの一粒に、急設された小さな飛行基地。

その基地に今、朝の光がほんのりと白く夜の明け初めを示していた。

環礁の内海は、鏡のように静かに白うねっている。環礁の外側は、大きな波がうねっている。リーフ(珊瑚礁の岩)に寄せては砕け、砕けては寄せて、波濤の響きが、海鳴りとなって、島全体に伝わっていた。

この小さな孤島の基地は、九二二年にわたる、敵の集中的圧倒的な海空からの猛撃により、破壊されつくしていた。最早や地上に建造物らしきものは一つもなく、生きた椰子の青葉も全くみられなかった。爆撃の跡の大きな凹地に、廢材を寄せ集めて急造した仮の兵舎があちこちに点在している。

空は明るさを増し、やがて朱色を加えた光芒が動きはじめてきた。それは絶対の美しさであり、神秘の輝きであつた。すべてに超越した悠久の光であつた。私が、今全身で迎えようとする今朝の光は、特別な意味合いがあつたの

(二)

だ。それは昨日、思いもかけぬ終戦の詔と停戦の命があつたことによる。この東雲は、祖国再建新生への、正に正に、東雲であつた。

マーシャル諸島マロエラップ島。

第二五二海軍航空隊。これがその時私がいた島の名であり、又第二五二海軍航空隊は、略して「二五二空」と呼ばれ、有名な零戦(零式戦闘機)の部隊であつた。

今自分史の範囲を越えて、二五二空の戦歴を辿り、同隊と同隊戦友への挽歌としたい。

昭和十七年九月二十日、千葉県木更津基地で、元山海軍航空隊の戦闘機隊を分離、独立編成として開隊、直ちに第二十二航空戦隊に入り、十一月九日ラバウルに進出した。私は奇しくも同じ十七年九月、海軍主計見習尉官として、海軍經理学校補修生に入校、十八年一月卒業、主計中尉として、二五二空付となり、ラバウルに赴任した。二五二空はラバウル↓ルオット↓マロエラップと、本隊を移しながら派遣隊をウエーキ(大島島)ナウル・ルオツ

ト・マーシャル方面に展開して、警戒防禦と補充整備を急いだ。南方進出以後の二五二空は、世界最高のゼロファイター部隊として、連日勇戦を続け、戦績を挙げ続けていた。戦死された多くの搭乗戦友のご冥福をお祈り申し上げたい。しかしその夢は早くも破られる。忘れもしない昭和十九年一月三十日未明のことであつた。

ようやく反攻の機を得た敵軍は、勢いに乗って、ついに中央突破作戦をわがマーシャル方面に向け、大機動部隊をもって大挙来襲したのである。圧倒的な物量差・兵力差によって、忽ちのうち、クエゼリン・ルオット・ブラウンが相次いで玉砕、敵手に落ち、私等がいたマロエラップを始め、ウオツゼ・ミレー・ヤルト・ウエーキその他の島々は、航空戦力壊滅のあと、徒手空拳、廢墟と化した孤島基地に尚一方的攻撃に抗する、籠城持久の戦いを余儀なくされたのである。以後、同方面の島々は、何れも苦悩の糧食戦を強いられることとなった。既に戦局の大勢は、マーシャルを通り越して、遙か本土を指向していた。最早味方軍の進撃はおろか、敵側さえも、我等を「自活せる捕虜」と呼ぶまでになつてしまつていた。籠城戦になる直前、飛行搭乗員等の転進(脱出)収容の為、夜間隠密に味方機が来たことがあつた。これが私等が接した味方機の最後であつたが、このとき転出の副長舟木忠夫少佐

(のち中佐になられ戦死、大佐)を司令として、二五二空の二世が内地で再編成されたのである。

そしてマーシャルの各島に分かれていた航空隊は、全部所在の島の警備隊に轉勤となった。

(三)

終戦の詔と停戦の令は、マロエラツプ防備部隊指揮官である第六十三警備隊司令鎌田正一海軍少将によって、全員に伝えられ隠忍自重して、祖国再建に努めるように訓示された。

全員驚愕と失意と悲憤と無念の思いが、頭の上から足の下まで電流が走るような強い衝撃に貫かれた。同時に「助かった」「生きて帰れる」という喜びと安堵がどっと湧き上がって来るのをぐっと押さえて聞き入った。思えば今日まで、とにかく「戦っている」という信念と誇りがあつた。生死を超越し、又超越しようとして来た。

戦局は最早マーシャルを通り越して、遙か遠くに後退してしまつたが、何時かはこの島にも敵の「片付け」がくるであろうと思つて来た。その時こそ我等の最後の戦いの場であると信じて来たのである。敵がこの島を入手使用しようとする時、かなわぬ迄も敵の上陸阻止の戦闘が展げられる筈であつた。例えそれが数日間か、又は数時間であつても、とにかく戦つて果てるのが、我等の唯一の道と心に刻みつけて来たのだ。

それが事もあろうに停戦——降伏とは、何とも口惜しい終末であつた。

これから祖国日本の歩む方向はどうか。東南アジア全域に広がっている軍人軍属の引き揚げはどうか。ましてこの南方海洋方面に、糧食・衣服・医薬の少しもない軍人工員等は、無事に帰国出来るのか、それは一体いつ頃の見込みなのか、戦犯というポツダム宣言の容疑は、どんな内容のものなのか、総てが憶測のみで全く判らなかつた。

私は主計科として、どんな事柄をどう処理し、何を先行すべきなのか、しかも情勢に臨機対応しながら、手落ちなく部隊の終戦処理と、人員の帰還復員を推進し、そして最終の残務整理完結の途を考えねばならなかつた。

一方に強い敗戦の虚脱と、他方に未経験の山積課題への焦りに私は自分を見失いかけたが、それも払拭し前向き姿勢に戻り得たのは、あの朝の、あの東雲の、あの静けさにうたれた、お陰であつた。

(四)

終戦になつたことは、平文電報で知らせて来たし、新聞電報でも繰り返して知らせて来ていた。

アメリカは、(敵という言い方をこれから改める)又無数のビラを散らし、外海から哨戒艇を接近、スピーカーで放送する等、終戦の事実を我等に知らせる多くの手立てをとつて来た。

そしてある日アメリカは通信筒を投下し、日英両文の書翰を届け、降伏調印を求めて来た。司令は上級の第四艦隊司令長官に連絡し指示を待たれた。

九月二日東京はミツリー艦上でその調印が終わり、次いで第四艦隊長官もトラック港外の米國艦上で調印、第六十三警備隊司令は、米駆逐艦ウイングフィールド号で調印をされた。何年振りに環礁内海に入った艦を見て、これが味方艦ならば、と無性に羨ましかつた。不思議に敵愾心というものは湧いて来なかつた。

九月下旬、島の中央大棧橋でアメリカの国旗掲揚式があつた。式には日米両国の兵隊百名づつが参加することになり、我が方は健康状態の良い者を選び、服装を整えて参加した。私はあえて参加しなかつたが、星条旗に生命が宿つてマストに根が生え、その根がどんどんのびてこちらに広がってくるように思え、この島に自分等の居場所がなくなり「負けた」ことを実感した。

式後島内を見て回つている無邪気な少年のようなアメリカ兵が、こわれた日の丸機をバックに写真をとつていた。アメリカ側は調印がすむと、直ちに内海の掃海作業を進めた。又、隣の島を切り開いて、グラント造りを始めた。機械力・物量差、そんな言葉が何回も何回も、私等の頭をかすめるのであつた。

方はすべて完全に手入れをし、磨きあげた小銃全部をはじめ目録をつけて「このとおり」と引き渡し出来るよう、送信所に集めていた。ふと私は「赤穂城明け渡し」の映画の場面を妙な時に思いだして来た。准士官以上の軍刀・長剣・短剣は、名札をつけて出すようにとのことで、後日返却予定と言われていた。私は海軍式軍装に仕上げた日本刀を袋に納めて提出したが、刀はついに返されなかつた。

(五)

主計科は俄然事務が輻輳して来た。アメリカから要請されることもあり、海軍省や鎮守府等に、報告書類作成がやまのように必要であつた。何よりも現在員の詳細な名簿を整え、戦死者の台帳を完備せねばならなかつた。

正式な「戦後日誌」も月毎に作成してゆかねばならない。それよりも兵隊全員の生存便りを家郷に発する手立てを考えねばならなかつた。

そんな時、警備隊主計長平田好蔵主計少佐が、家郷への便りのはがき文の例文を作つてアメリカ側の承認を得て下さつたのはありがたいことであつた。

又、戦死者の墓地の大整理が必要であつた。戦死者は初めのうちは遺体を箱に収め厳肅な告別式も出来たが、後になるほどそれは簡単に浅い穴を掘つて、上に土をさせるだけが精一はいに

なってしまう。「裏島」とよんだ墓地の遺体を掘り起こし、左掌小指と薬指の小関節の骨だけとって、丁寧に焼き封筒に入れて記名し、そのあとの骨は全部まとめて火葬にし、その残りの遺骨を新設の慰霊の碑の下に収め



マロエラップ環礁タロア島の墓碑

昭和二十年十月十日、第六三警備隊は同島撤退の際、柳村二五二空司令以下二〇五九柱（海軍一八五〇柱、陸軍二〇九柱）の遺骨を埋葬し写真の通り墓碑を建立した。その後墓地と附近の施設は爆撃によりすべて破壊された。

〔環礁〕 8号(3頁)

た納骨墓碑（写真）は、第四海軍施設部マロエラップ派遣隊が造成し、日英両文で「戦死者の墓」と記された。私には戦死された二五二空司令柳村義種少将と、主計科分隊長の納骨に奉仕した。

(六)

十一月、マロエラップの防人等の祖国帰還が始まった。一番は要急送患者約三十人が、ミレ入港の病院船氷川丸で、二番は海防艦国後に施設部・航空廠の軍属約二百人、そして三番は空母鳳翔で警備隊が大部分であった。

我が空母が環礁内海に入ってきたときは、私等はただ懐かし涙にかすんで、大きな航空母艦が見えにくかった。鳳翔はヤルト・マロエラップ・ウオツゼの順に、入港収容の手筈であった。そのあと海防艦一二六号が来て、陸軍約一五〇人が帰国し、これで全部が収容帰還することになった。司令鎌田少将以下十一名が戦犯容疑のため、アメリカ側の指名によって残されたが、この島での容疑事実はなく、後日全員無事に帰国された。乗艦を終わり飛行甲板からマロエラップの島を見る。ほんとうに小さな島であった。

「こんな小さな島で、よく弾にあたらなかった」皆不思議な感じがした。

さらばマロエラップよ。

(七)

復員兵を乗せて艦は一路、北上した。

航路、九日。一日一夜涼しさを増す。防暑服でうだつていた私等は、朝にズボンを長くし、夕に下衣を重ね、夜にシャツを着込むなど、冬服のある者は冬服をつけた。内地の山々が見え出した。甲板から日本のなつかしい海を見下す。小さな船に漁をする人が見えた。私等は甲板から見て、一様に気にしていた。敗れて戻る兵に、国の人々が手をふってくれるだろうか、と心配であった。

押し花

埼玉県 北原 ひで子

世界地図を掲げて見ると、太平洋の只中に針の先で突いたような点々があり、マーシャル諸島とある。この点々にも印されていないミクロの島々の中に夫の散華したウオツゼ島があり、日本本土から直線でも、六千キロと言われ、はるか海の果てである。

昭和六十年三月十日、私は日本遺族会主催の現地慰霊巡拝団の一員として、ウオツゼ島行きが叶えられた。夫が戦死してから四十一年もの歳月が流れたが、悲願の旅であった。

成田から空路、島々を飛び石伝いに飛んで到着した所は、マーシャル諸島共和国マジロ空港である。真夜中であつたが、現地の人達が人垣を作つて迎えてくれ、日本流のお辞儀をしながら一人一人にきれいなレイをかけてく

た。私等を見上げて、漁の人が手をふつてくれた。私等帰還の兵は、ほつ、として、皆一せいに手をふつた。

(7・7・10)

(註) 本稿関連記事

〔環礁〕 8号（マロエラップ環礁の印象）同31号、33号（ルオットとマロエラップと）同56号、58号（杵き雲の下で）50年記念誌「南十字星」21頁

れた。

翌朝、ウオツゼ行きグループ七名は本会の篤志会員でマジロ在住の山村様同行していただいてマジロを発つた。途中のマロエラップを離陸して暫くすると雲の間からこれも雲かとまがう一筋のものが目に入る。環礁か？、ウオツゼ環礁かと目を凝らして見入っていると、その線は白とグリーンとの弧となった。ウオツゼだ、と心も躍るばかりに機窓に額をつけて見ていると、だんだん島となり地図で見た勾玉の形となつて広がってきた。椰子林を眼下に機はまもなく草の生えた広場に着陸した。不意の飛行機の到着に島民たちが集まつて来た。

昭和十九年九月、夫はこのウオツゼ島で戦死したのだった。

この島の滞在時間は二時間という限られた時間なので着陸後、私たちは大急ぎで行動を開始した。当時、滑走路であつたコンクリートが僅か残ってい

る所に荷物を入れて、携えてきたアイスポックスを置き、その上に日章旗を拡げて祭壇を作り、小型の花輪を飾った。日本から持参したローソクを灯しお線香をあげた。猛爆撃と飢餓に苦しんだ霊たちのためにそれぞれ故人の好きだったものを供えた。塔婆もなく、僧侶の読経もない中で皆でひたすら祈り、最後に「海行かば」を歌ったが、互いに声がつまりとぎれ勝ちだった。霊前の供物と、日本から持ってきた島のこどもたちへのおみやげを山村様を通じて、島の代表の方へ渡した。

それから私はかねて戦友の方から教えていただいたメモを片手に、山村様に案内していただき、島の西北に当たる夫の最期の地を尋ねた。私は一人、ここらあたりと思う所にふる里の水と線香を供え、写経、子どもや孫たちから預かってきた手紙を供えながら心の中で「わたし、とうとうきましたよ、こんなところで、さぞ」と只々言葉にならず、涙は溢れるばかり、しばしこの場を離れ難くおそなえものを傍の海に流し、海水を瓶に入れ浜の靈砂を袋に納めた。帰りの時間が迫った。

飛行機に戻る道々、咲いている野の花を押し花にと摘んだ。夫や戦友たちの御霊が宿っているかのような野の花に、「お迎えにきましたよ、一緒に日本に帰りましょう」と念じながら……。

二時間はほんの束の間であった。間もなく機上の人となつて、手を振る島

の人たちにおくられながら、今歩いたばかりのウオッセ島を眼下に、機は次第に高度を上げて遠ざかる。緑の島は次第に弧となり、遂に線となつて視界から消えた。私はウオッセの青い海をいつまでも眺めていた。

マジユロのホテルに帰り、夢のようだった今日のウオッセ島を思いながら、摘んできた草花を整理し日記帳、記念ブック、メモ紙などに挟んで旅の袍をのせて押し花にした。

マジユロはマーシャル諸島共和国の中心で、島の中央部に、昭和五十年に日本政府の建立した「東太平洋戦没者の碑」があり、碑の中心軸ははるか日本の方角に向い、日、英、マーシャル語で慰霊のことが記されている。赤道直下、スコールが毎日のようにあり、木々がよく繁っている。

私達の滞在中、島の方々の歓迎会、交歓会が催されて、日本の唱歌「ふるさと」や「富士山」など、また戦前、戦中のなつかしい歌やマーシャル民謡なども聞かせてくれた。

夜、浜辺に佇んでいると、これらの島々でかつての将兵たちが望郷の念にかられたであろう、その切ない叫びが胸に伝わってくる思いであった。

み霊をば宿るかと思ひウオッセの摘みし押花色褪せにけり

クエゼリンに散華した兄

山梨県 黒川 正文

兄の若き日のことを思い出すと、心が凍りつき目頭が熱くなります。

十歳うえの兄に連れられて風あげにいったこと、剣道の稽古の邪魔をして叱られたこと、東京の看板屋さんに勤めながら休日在家の商売の看板を書いている姿等が遠い想いになつてしまいました。

勤めながら苦学して武蔵野無線学校を卒業し、お国の為に身を捧げるつもりの方でした。徴兵検査で甲種合格になり陸軍へ入営する時、塩山駅まで父母と一緒に送りに行きました。

親戚と近所の人につけて頂いた千人針を腹に巻いて大勢の人に見送られて汽車のデッキで手を振った姿は鮮明に私の脳裏に残っております。その後、兄の姿は二度と私の前には現れませんでした。

父母は一度だけ甲府の六十三連隊へ面会に行きました。その時兄の左の歯が無いのに気づき尋ねたところ、全体責任で上官に殴られて歯が欠けたとの事でした。今の人には考えられないことです。その後、陸軍無練兵として満洲の北安(ペイアン)に配属され、そこで訓練を受けておりました。

何人が南方方面に選抜され其の中に入ってしまった。最初はトラック島の周辺の島にいるのではないかと家族で心配しておりましたが、終戦少し前に、マーシャル群島のクエゼリン島で名譽の玉碎との悲報が入り、家族が悲しみのどん底へ突き落とされました。特に母の嘆きは大きく何日も食事がのどを通らなくビツクリするぐらい寝れませんでした。父を始め六人の兄弟で協力して母を慰め、やっと健康を取り戻しました。

マーシャル方面遺族会の役員方の永年の御協力により、マーシャル群島の状況がよくわかりました。英霊の皆様方が生き地獄の中で奮戦し、国の為掛け替えの無い若き命を捧げ、ひたすらに家族の幸福を祈りながら黄泉へ旅たつた事と思います。今は既に父母も姉もなくなり、人生のはかなさをつくづく思います。

五十二年たった今、大東亜戦争は何であったか、戦死なさった英霊の死を無駄にしないよう、残った我々一人一人が世界の平和にとめて、大東亜戦争で戦死なさった御霊を永久に祀りましょう。

私も存命中にマーシャル群島の墓参にぜひ行きたいと思っております。それが御霊に対する万分の一の御奉公だと思っております。

「第七五二海軍航空隊の航跡」 を読んで

篤志会員 長谷川 栄次

まあ何と懐かしいと云うか、残念と云うか、色々の思いが浮かんでくる。私は改めてご遺族にお詫びしなければならぬ。あのルオットやクエゼリンに飛行場を作らなければ両島の玉碎はなかったであらう。

私がこんなことを申すのは、あの島を調査して中央当局に、飛行場適と報告したばかりに飛行場が出来、悲劇が発生したからである。

開戦前、中央当局はもし米國と戦争になったら米國艦隊は先ず内南洋を攻略してそこから本土を爆撃するであろう。依つてその前に日本が内南洋に飛行場を作り敵を近づけぬようにする必要があるから、昭和十四年八月に私の勤務していた横浜航空隊に基地調査が命令された。臨時の母艦衣笠丸を伴い、専門の技術者も同行し、訓練を兼ねて約一ヶ月半をかけて、マーシャル、マリアナ両群島を詳細に調査したのであった。戦後既に半世紀を過ぎたがご遺族の皆様は何時迄も思い出は盡きないことでしょう。この会報はいついつ迄も続けて頂きたい。私の知る範囲ではこのような立派な遺族会報は他に例を見ない。これは浮田先輩の計画が良かったことに加えてあとを継いだ役員の方々

の努力によるものと思う。私は九十六歳を迎えたが本誌だけはいつ迄も拝読したい。

「七五二航空隊の航跡」の筆者橋本岩樹氏は、七五二空の数少ない生き残りの勇士であり、かくも詳しく書いて下さったことに敬意を表します。文の中に懐かしい人の名が次々と出てくるので、読む程に胸が躍りました。

園山 斉さん（少将）は兵49期で、気球専門から飛行機偵察の特種学生として小生と霞浦で一年間一緒に習った仲。

森 敬吉（後荒木）少将（兵45期）は、13期飛行予備学生土浦組の司令、小生は三重空組の飛行長で毎月一回両隊の司令、飛行長の会合があり、毎回お目にかかっていた。

山田道行さん（中将）は兵42期で大先輩。私が霞浦飛行学生の時の、隊長兼教官でお世話になり忘れられない。

井上梅二郎君（大佐）は、同クラスの52期で霞浦では彼は偵察学生、小生は操縦学生として入学も卒業も同年の最も親しい仲。又、学生仲間での家族持ちは、彼氏と小生の二人きりで、家内同志も親しくしていた。長男賢雄君とは時々連絡をとっている。

六根司令官秋山門造先輩（中将、兵42期）は、僕が兵学校生徒の時、秋山大尉として砲術教官であった。

世の中 狭いものです。
（註）階級は戦死した時のもの

ナウル島から。ピエズ島へ

Ⅱ ナウル守備隊の苦闘Ⅱ

ソ連のカムチャツカ半島の東海岸沖、東経一六六度五五分から真っ直に赤道を越え南半球に入った処に外縁を珊瑚礁で囲まれ周囲一九キロの孤島がある、これがナウルで昭和十七年八月二十五日から昭和二十年九月十三日まで海軍の第六十七警備隊と横須賀鎮守府第二特別陸戦隊が守備していた。

昭和十八年早々に米軍の大反攻が始まり、ナウルを取り巻く周囲の島嶼が次々と敵の手中に陥ち敗色は日を追うごとに濃くなって来た。こうした四面楚歌の中でナウル島守備隊は正に孤立無援、連日連夜の米大型機の熾烈な反攻攻撃と飢餓と悪疫の悪戦苦斗の明け暮であった。

やがて聖旨によって終戦、降伏した。ナウル島守備隊は昭和二十年度の連合艦隊編成表では第四艦隊に属し終戦処理を米軍が担当していれば真つ直ぐに内地に帰れたはずなのにナウル・オーシャン両島はオーストラリアの行政区であった為豪州軍が担当し遠くソロモン諸島に強制連行され、ブーゲンビル島トロキナでは炎天下に豪州軍の銃剣に追いたてられ強行軍を強いられた。数日後、次の収容所ブーゲンビル海峡

神ジン西ザイ義 信
（ナウル通信会会長）

に浮ぶピエズ島に再び移送された。ここはマラリア蚊の巣窟で、衰弱の極に達した兵たちに更に追い討をかけるように食糧不足とマラリアと豪州軍の強制使役（労働）に駆り出され、収容所は栄養失調症で衰弱した幽鬼のような兵隊が溢れ地獄絵図さながらの様相であった。

僅か抑留三ヶ月の間にマラリアの処女感染で肉親の待つ懐かしい祖国帰還を前にして灼熱の悪疫しようれいの蛮地ピエズ島で万斛の恨を残して急速に斃れていった。

豪州軍にとって憎い者は一にアメリカ軍、二に日本軍といっているがトロキナでは食事も支給せず、一滴の水も与えず二十名の死者を出した二十数キロメートルの強行軍といい、ピエズ島では原住民も住まないマラリア蚊の猛生息地に抑留し、薬剤も与えず僅かな食糧を支給して栄養失調に陥いれ半数近くの四百名を死に至らしめた。間接的には虐殺したのも同然で豪州軍の行為に過ちはなかったか。本件については国立大学のシンソズ教授の言によればオーストラリアの国会でも、批判されたと聞く。トロキナ、ピエズの惨劇

は、戦勝国豪州軍の驕りが齎らした人災であった。

死者にとつてはこの上もなく厳肅な一人ひとりの死であり死とはかけがえない唯、一つの生命の終りで二度と蘇らない。敗戦とは、こんなにも悲しく惨めなものである。

昭和六十二年政府派遣団がピエズに入島したがこのチームは調査搜索収集班でピエズ島への渡島ルートの調査・野営資材・食糧品の市場調査・地主との伐採契約・村長との現地協力員の労務契約・ピエズ島では埋葬地の確認作業が主目的であった。十一区では三ヶ所の試掘を行い埋葬地を確認することが出来た。続いて六十三年には十一区の本格的遺骨収集を行い正月五日間の入島期間ではあったが六十六柱を収容した。昨年度と合せて七十柱の御遺骨を祖国日本に捧持することが出来た。

本年以降も継続的に実施されるが、御英霊は固より御遺族の心情を思えば一日たりとも忽せにしてはならない。

こんな観点から痛憤極まりなき極限情況のなかで力つきて遂に散華された英霊鎮魂の爲にも、その苦難を記録して後世に残しておくことが生き残ったものの責務でもありまた最高の供養でもあると痛感する。

死は何時でも厳肅な真実である。まして軍人の死は。

(註) 筆者は、第六七警備隊分隊士として従軍、戦後ナウル通信会を結成、

現在も会長として活躍中。同会発行の「ナウル島」と「ピエズ島」はナウル島守備隊の記録として評価が高い。「ピエズ島」は参考書価値もあり、送料共二千円で頒布中です。

昭和六十二年政府の遺骨収集団員としてピエズ島の収骨作業に奉仕した。

連絡先は、山口県豊浦郡豊浦町

小串大先

電話 〇八三七七四一〇八一〇

お便りの中から

群馬県 日向野 キク

佐藤会長様

この度は、夫日向野^{ヨシノ}禄^{ロク}寿(明治四十四年生れ、海軍兵曹長)のことにつきまして行き届いた御配慮を頂き、お蔭様で五十年の間願っていたことがわかってまいりました。

「環礁」64号の「お元気ですか?」を読んで下さった会友の塩野宜徳様(ナウル主計会代表)が貴重な御本を、会長様を経由してお貸し下さり又、会長様からナウル通信会会長の神西^{カニシ}様に協力を依頼され又、同会の発行した御本二冊を頒じていただきました。早速拝読させて頂き、今日まで全く不明であったナウル島と夫の終焉の地ピエズ島の状態がよくわかりました。

十八年から三年間、ナウル島守備のため辛苦をつくし、敗戦によって人間の住めないマラリア蚊の群生地、食糧も医薬品もないピエズ島に強制移住させられ生地獄さながらの責苦をうけたと書いてありました。

会長様は又、ナウル島関係の会友江村源次様、小林重雄様などにも御協力を依頼し、更に、海軍の全国組織の海交会全国連合会に依頼して機関紙「海交」三月十五日号の尋ね人欄に記事のせて下さいました。思いのほかの反響で、大ぜいの方から電話や手紙を頂きました。伊香保で催されたナウル四高会(第四高角砲台)には特にお招きを頂き当時のことを詳しくお伺いすることができました。

全国ソロモン会事務局長の菊本享様は、厚生省の遺骨収集団員として三月三日出発、ピエズ島から九十七柱、その近くで十三柱を収骨し厚生省霊安室

に納めて帰宅し、「海交」を見てすぐお電話を下さりお疲れを癒す間もなく三月二十六日に前橋の拙宅を尋ねて下さいました。

遺骨替わりにとピエズ島のきれいな貝(写真)を仏前に供え、丁寧に詣りし、ピエズ島での収骨の状況を詳しくお話し下さいました。学校勤めの長男も駆けつけお話を拝聴しました。

三月に帰還した遺骨を千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお納めして拝礼する儀式の遺族代表に加えられ、五月二十七日に三笠宮寛仁親王同妃殿下御来臨のもとに厳肅な式典が行われ、両殿下より御会釈を賜わり感激いたしました。

会長様の温い御配慮と御熱意によりましてこんなにも早く永年の願いが叶えられ、肩の荷を降した心地がいたしました。

会長様ほんとうにありがとうございました。何時までも御壮健で英霊のため遺族のためにおつくし下さいますようお願いいたします。

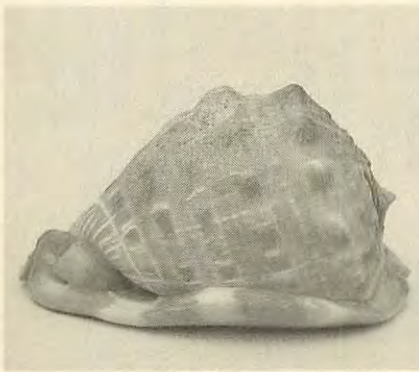
意をつくせませんがとり急ぎ御報告と御礼まで

かしこ

終のとき近しとおもう病後にて知り得し夫のピエズ終焉

八十路越え果なき今我が夫はピエズの島よりようやく還る

拝礼式 息つめしまま おろがみぬ



昭和天皇御製

伊勢神宮に参拝して（昭和五十五年）

五月晴 内外の宮に いのりけり
人びとのさちと 世のたひらぎを

【五月拝殿揭示】

靖國神社だより

春季例大祭盛大に齋行

平成八年の靖國神社春季例大祭が、神苑の八重桜が美しく咲き誇る四月二十一日から二十三日までの三日間、盛大かつ厳肅に執り行われた。

祭典は、二十一日の「清祓」、二十二日の「当日祭」、二十三日の「第二日祭」、「直会」と諸祭儀が滞りなくすめられた。

二十二日の当日祭には、天皇陛下が勅使を御差遣になり御弊物が奉られ、皇族方も親しく御参拝になられた。

「清祓」執行

春季例大祭奉仕にあたり、大野宮司以下全神職は二十日夕刻から齋戒、参籠に入った。

明けて二十一日午後三時、拝殿前南庭で清祓「祓所の儀」を執行、参列諸員が祓の麻をとり、心身を清め更に殿内、神域、祭儀の諸具を祓い清めた。引き

続き御本殿に進み、例大祭がつつがなく奉仕出来ますようにと清祓「本殿の儀」を奉仕した。

勅使・本多康忠掌典参向

明けて二十二日の「当日祭」は、天候にも恵まれ、中井澄子日本遺族会会長、堀江正夫英霊にこたえる会会長、原多喜三奉賛會会長代理、工藤伊豆神本社廳統理代理、小田村四郎崇敬者総代をはじめ、各界代表六百八十名が拝殿に参列する中、午前十時、大野宮司以下奉仕員が御本殿に進み祭典を執行。

まず國學院大學吹奏楽部の奏する「国の鎮」と共に、御内陣の御扉が開かれ、次いで和妙・荒妙をはじめ海川山野の神饌五十台が供せられた。

次いで大野宮司祝詞を奏上。午前十時三十分、参列者が奉迎申し上げる中、本多康忠掌典、勅使として参向。御弊

物を奉獻し、大御心のまにまに御祭文を奏上せられた。

次に國學院大學フォイエルコール混声合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼。その後、宮司は参列者に対し挨拶を申し上げた。

翌二十三日の「第二日祭」は井内慶次郎崇敬者総代をはじめ、全国から集まった御遺族、崇敬者など六百名が参列して執行された。また、午後六時には、祭典が無事終了した感謝を奉告す

高松宮殿下 硫黄島へ

阿川 弘之

☆本稿は、海軍出身の作家阿川弘之先生著「高松宮と海軍」（中央公論社発行）の一節を、著者と発行所の厚意により転載しました。

最近のある日、渋谷のネイビー・クラブで会員の要望により私は、「高松宮日記」編纂に関する余話を、四十分ばかり喋らされた。終つて質疑応答の時間、兵学校七十五期生飯田耕作と名のある実業家の方が、あなたの話の補ひにと、硫黄島の戦跡を訪れた高松宮様の話を披露した。今も島の壕の廻りに散らばつてゐる将士の遺骨に、殿下が、随行者の者皆びつくりするほど敬虔な態度をお示しになつたといふのである。

る「直会の儀」を執行し、春季例大祭は滞りなく終了した。なお、今回より祭典参列者全員に直会品の神酒と赤飯が配られた。

皇族方お揃いで御参拝

また、この度の例大祭期間中、二十一日午後一時三十分には三笠宮同妃両殿下、高円宮妃殿下が御昇殿、玉串を捧げて拝礼せられ、次いで拝殿にて奉迎の遺族崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

聞いて強い印象を受け、

「そのお話、次の編集会議の時、妃殿下に申し上げることにしませう」

私は礼を兼ねてさう言つたが、実のところ、飯田氏が島へ、殿下と御一緒したわけではないらしかつた。飯田さんの友人橋本龍太郎氏が、その場において、後日語つたのだ。それを私が、又聞きのと聞きで妃殿下に伝へては、内容正確を欠くおそれがあると思ひ、一度橋本さんに紹介して下さいませんかとお願ひした。

現職通産大臣の橋本龍太郎氏は、スケジュール分きさまの忙しい身体らしかつたが、飯田さんの口ききで何とか都合をつけてくれ、二十分間の面接が

実現した。そこで聞いて来た話を私なりにアレンジすると、概略次のやうになる。

橋本氏の生年月日は昭和十二年の七月二十二日、蘆溝橋事件勃発の二週間後、大東亜戦争の戦死者たちが叔父さんか兄貴分にあたる齢ごろで、従来遺骨の収集供養には大変熱意を持つてゐた。フィリップ、ビルマ(今のミャンマー)、パプア・ニューギニア、十何回か収骨の旅をかさねて、一度どなたか皇族に此の現状を見て頂きたいと思つてゐた。

今から二十四年前のことだが、昭和四十六年三月、厚生政務次官の時、その希望が叶ひ、高松宮様と一緒に海上自衛隊のYS11で硫黄島へ飛ぶ。新しく発見されて、未だ整理の済んでゐない洞窟があつた。米軍が火焰放射器を使い、奥へ逃げこむ日本兵をブルドーザーで生き埋めにしようとした為、苦しみもがき、土掘つて出ようと試みた者みな、窒息死の状態で、その骨が入口周辺に折れかさなり積みかさなつてゐた。ちかかにありのままを御覧願ふのが一番いいと思つて、事前に余計なことは話さなかつたので、殿下は何の予備知識も無いまま、洞窟の前へ立たれた。一眼みてハツと息つめられる気配があり、やがて地べたに正座して、両手を突き首を垂れ、ぢいツと瞑想状態に入られた。同行の厚生大臣、政務次官、その他誰もが電気をかけられたやうに

なり、何を申し上げることも出来ず、ただうしろに立ちつくしてゐた。

どれだけか、大変長く思へる時間が経過し、一言も言はず立ち上られた殿下を、皆で次の壕へ案内した。さきの新発見の壕は、到底中へ入つて視察してもらへる状態ではなかつたが、今度のなら、整理が終つてゐる。それでも、収集し残した骨の小片があちこちに散らばつてゐた。先導の者につづいて洞窟内へ入りかけて、宮がちよつとためらふ様子を見せられた。おそらく、土足のまま戦死者の遺骨の上を歩くことにこたはりを感じられたのだらう。つと、靴を脱ぎ沓下をはぎし、素足になつて、それから殿下の壕内視察が始まつた。

硫黄島には海上自衛隊の駐屯部隊がゐる。隊員たちに聞いてみたが、此処ではみんな、止むを得ざるごととして、骨を靴で踏んで歩くのが普通になつてをり、素足で壕へ入つて行つた人なんかこれまでありませんよとの話だつたと。

(註) 記録によれば、昭和四十六年三月二十八日午後二時から硫黄島で、高松宮殿下御臨席のもと、遺族代表四十七名、内田厚生大臣、橋本厚生政務次官ほか関係者、報道関係者等多数が参列して、「硫黄島戦没者の碑」の竣工式、追悼式が厳粛にとり行われ、式典終了後一行は島内の主要戦跡をめくり、あらためて戦没者の冥福をお祈りした。

新緑の美しく映えるなか

千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

平成八年度の政府(厚生省)主催の、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式は、五月二十七日(月)、寛仁親王同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、多数の来賓、遺族代表が参列し、厳肅盛大に挙行された。

この日、五月晴れの爽やかな青空のもと、眩しい程の美しい新緑に囲まれた六角堂(納骨堂)の墓前には、天皇皇后両陛下御下賜の、大花籠一対が供えられ、式場には荘厳の気が満ちてゐた。

拝礼式では、旧ソ連、東部ニューギニア、マリアナ諸島、フィリピン、ビルマ、硫黄島等で収骨され、また名古屋北山墓地に埋葬されていたグアム、テニアン島の御遺骨も納骨されたが緑りの御遺族、遺骨収集協力者が参列してゐた。

定刻十一時やや前には内閣総理大臣ほか来賓も到着、大天幕の席は満席になつた。

まもなく総員起立するなか寛仁親王同妃両殿下が御臨場になつて式典が始まり、先ず住厚生政務次官の開式の辞、続いて海上保安庁音楽隊の奏楽による国歌唱和のあと、菅厚生大臣が式辞を述べられた。

続いて御遺骨が佐々木社会・援護局長から菅厚生大臣に渡され、大臣は捧

持して地下の納骨室に丁寧に安置された。

このあと、総員が起立するなか、両殿下が墓前にお進みになり御拝礼なされ、参列者一同も肅然と拝礼を行つた。

御拝礼を終えられ、遺族席に向つて御会釈を賜わる両殿下をお見送りしたあと、献花に移り、内閣総理大臣、厚生、外務両大臣、収骨の行われた国の駐日大使、防衛、環境両長官、衆参両院厚生委員長、日本遺族会会長、このあと、九名の御遺族代表の方々が続き、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の瀬島会長が締めくくりの献花、拝礼を行つた。

最後に、多田厚生事務次官が閉式の辞を述べて拝礼式は滞りなく終了した。

式典終了後、一般参列者は墓前に進み、両陛下御下賜の大花籠を仰いで拝礼をしていたが、御遺族の方々の感慨深げな御様子に胸を打たれた。

この度の拝礼式において納められた御遺骨は一、九五四柱で、当墓苑には三十三万九千三百八十一柱が奉安されることがになった。

縁 (えにし)

鎌田 いね子
(黒川三男命 妹)

川崎中瀬に嫁いで早四十年の歳月が流れました。長かったようでもありあつという間のような気もします。私が結婚したのは、お大師様の近くに住んでいた叔母の世話によるのですが、そのきつかけは、十九歳の厄年に兄に連れられお大師様に厄除祈願にお参りしたことでした。そのことによつてご縁をいただいたのだと思います。

結婚当時は、舅、姑、弟、妹と、六人家族でした。姑は心の優しい家族おもしろい人でした。また、とても信仰心の篤い人で、何かといえはいつもお参りしているお大師様のことを話してくれました。そして、先代様のことを「情がこまやかであたたかいお方でした」とよく話して聞かせてくれました。その姑は、昭和五十五年に心不全で他界しました。ほんの一晚の患いで眠るように、安らかに逝つてしまいました。

生前の姑がよく口にしていた言葉に「六根清浄」があります。日々の生活、信仰の目標にしていたのだと思います。私はまだ、姑の年齢にはいかなければ、姑のそうした日頃の信仰の言葉が、やつと分かるようになってきました。

私はいま、お大師様の「平間寺茶道教室」に通わせていただいています。

もうかれこれ、十五年になりました。良き先生に恵まれ、懇切なご指導に、週一回の稽古日が待ち遠しいほどです。中書院のお茶室も素晴らしく、ここで学べる幸福をかみしめています。そして掃き清められた境内の紅白の梅、花みずき、れんぎょう、椿など、四季を通して咲く花々を觀賞させていただくのも楽しみの一つです。

私は、ここ何年も迎春のお護摩札浄筆に奉仕させていただいています。一筆ごとに心を込めてお書きしています。浄書係のチームワークも大変よく、奉仕員の人たちは黙々とお仕事に精進しています。そんな私たちに、ご貫主様があたたかい労いのお言葉をかけてくださいます。疲労感も消え去るおもいです。

私はまた、夫と共に毎朝ジョギングをしながらお大師様へのお参りをし充実した日々をおくらせていただいています。二人の娘もすでに結婚し平穏な毎日を過ごしております。これも偏に、お大師様のご加護の賜と感謝いたしております。

護摩焚かるる貫主の顔火かほに映へて仏の化身の威厳もちたまふ

世の光なべてあつめて来るらし塔の相輪秋の陽を返す

境内の篝火大きく燃へ盛り眼なしだるまも投げ入れられぬ

名簿訂正 (10) ◎ 平成 3 年 8 月 15 日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
26	大波 恵美子	〒965 会津若松市城北町 8-19 ☎0242-22-8653 戦歿者大波操 続柄長女 所属部隊 3 特根 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 ケゼリン <新入会>
27	柴田 政子	〒318 高萩市本町 4-71 ☎0293-23-1920 戦歿者柴田一郎 続柄妹 戦歿年月日 18. 11. 28 戦歿地 ミレー <新入会>
28	藤原 よし子	〒318 高萩市島名 2150 ☎0293-23-3510 戦歿者木村新一郎 続柄妹 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 ケゼリン <新入会>
30	片桐 覚治	〒346 久喜市南 3-6-2 ☎0480-23-0341 戦歿者片桐喜治 続柄兄 所属部隊 755 空 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 ルオット <新入会>
31	千田 恒子	北原台 1-3-12 に変更
35	石谷 トシ	典夫 (三男) が継承
35	岩浪 きよ子	岩浪邦江 (長女) が継承
36	小林 法子	〒144 大田区蒲田本町 1-1-2-606 号下浦方 ☎03-3734-2487 に変更
46	新保 保子	千谷沢 1152-1 に変更
46	堀尾 藤吉	新保晃 (弟) が継承
52	堀尾 厚	堀尾洋平 (甥) が継承
58	土井 厚	〒655 神戸市垂水区海岸通 3-6-701 ☎078-708-9806 戦歿者土井與市 続柄二男 所属部隊 永興丸 戦歿年月日 19. 1. 30 戦歿地 ルオット <新入会>
58	土井 久司	〒655 神戸市垂水区五色山 8-2-22 ☎078-706-0055 戦歿者土井與市 続柄長男 所属部隊 永興丸 戦歿年月日 19. 1. 30 戦歿地 ルオット <新入会>
61	瀬戸 隆子	三玉 745-2 に変更
63	石田 藤美	下勝間 737-6 に変更
64	伊藤 梅子	〒793 西条市大町 1544 に変更
64	宅見 保子	井野浦 120 に変更
66	石居 文彦	〒816 春日市昇町 5-151 ☎092-572-4758 に変更
66	居松 本村	〒832 福岡県山門郡三橋町蒲船津 118-4 ☎0944-74-4643 に変更
71	松野 義盛	〒861-73 熊本県天草郡有明町上津浦 2541 ☎0969-53-1412 に変更
78	野村 盛弘	書写台 3-90 に変更

鎮魂 五十年記念誌

「南十字星」刊行

平成七年二月、五十年祭記念行事の一環として記念誌を刊行しました。御入用の方に、申込順に在庫限り一部五千円(送料共)でお頒けしております。代金は郵便振替で前納下さい。

A4版68頁 題字は大給相談役御揮毫内容は写真記録20頁、戦域の状況11頁本会のあゆみ17頁、年表10頁ほか。上製本(濃紺クロス貼 題字金箔押)



次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|----|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|----|------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-----|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 米田 正子 | 山田 正三 | 三沢キヨメ | 溝口ハナコ | 廣原 チヨ | 宮本 豊吉 | 谷沢 英子 | 高橋 梅子 | 高林 セキ | 藤田 ヨリ | 佐々木千鶴子 | 藤本 正 | 松本タカミ | 津久井艶子 | 豊谷美恵子 | 芳賀タツエ | 坂井 繁男 | 渋谷セキノ | 高野 清 | 浦手 ハル | 奥井 礼子 | 小林アヤ子 | 千葉 県 | 石川 きみ | 浄永 孝 | 小林 正道 | 近藤 茂 | 佐藤 フジ | 廣島 県 | 荒谷ミキエ | 植田 敏祐 | 櫻井 かね | 柴田 貞子 | 藤田 清瀬 | 新 潟 県 | 安中 キヨ | 片桐 さき | 岡山 県 | 金子ミサヲ | 浜田 数江 | 小野 リエ | 北原ひで子 | 近藤マリエ | 吉田 正次 | 吉田 操 | 島根 県 | 園山 和子 | 及江 | 群馬 県 | 珍田 光子 | 日向野キク | 糞谷 友孝 | 佐藤 登志 | 齊藤 則男 | 和歌山 県 | 福井 栄子 | 山形 雅俊 | 若狭 明光 | 堀江 誠一 | 北條 晃 | 神奈川 県 | 赤坂 スズ | 伊沢 ヤス | 大阪 府 | 中野フヂエ | 馬場富美子 | 栃木 県 | 猪瀬 ナカ | 木村恒三郎 | 岩瀬三樹三郎 | 大石岳男 | 沖立 キヨ | 兵庫 県 | 枝光 剛郎 | 土井 厚二 | 田名網武夫 | 吉川 芳蔵 | 金子 武晴 | 川名 茂子 | 熊沢 静子 | 土井 久司 | 安福 道明 | 山形 雅俊 | 埼玉 県 | 井沢 なを | 宇田川ひさ | 志田 富雄 | 渋谷 良雄 | 露木 千鶴 | 鳥取 県 | 杉川 及江 | 埼玉 県 | 北原ひで子 | 近藤マリエ | 吉田 正次 | 吉田 操 | 島根 県 | 園山 和子 | 及江 | 丹野 アサ | 楠 宗親 | 鈴木ヨシエ | 番場 信子 | 昼間 樂平 | 望月とよ子 | 三 重 県 | 近沢 あき | 山田 あき | 山形 県 | 秋保 十郎 | 小野田正一 | 沼山 正英 | 蓮沼 常子 | 長谷川智子 | 川越 コウ | 浜田 芳枝 | 山田 あき | 山本 ちゑ | 奥山 キノ | 近藤キクエ | 高橋 鎮夫 | 佃 喜美 | 出口 スエ | 土屋まさ子 | 野崎 豊秋 | 服部くにゑ | 秋田 県 | 奥山 キノ | 近藤キクエ | 高橋 鎮夫 | 佃 喜美 | 出口 スエ | 江藤ふみ子 | 大塚 かね | 後藤 行雄 | 丹野 アサ | 楠 宗親 | 鈴木ヨシエ | 番場 信子 | 昼間 樂平 | 望月とよ子 | 三 重 県 | 近沢 あき | 山田 あき | 福島 県 | 三浦 一郎 | 安井 文子 | 矢野 雄三 | 山口 裕子 | 京 都 府 | 川本 彦次 | 谷 正文 | 茨城 県 | 大熊 正美 | 神谷 和枝 | 山森 久江 | 六軒つる子 | 渡辺 妙子 | 中川 修 | 村上 増枝 | 正文 | 富田 保 | 堀江 誠一 | 北條 晃 | 神奈川 県 | 赤坂 スズ | 伊沢 ヤス | 大阪 府 | 中野フヂエ | 馬場富美子 | 富田 ミツ | 三浦 一郎 | 安井 文子 | 矢野 雄三 | 山口 裕子 | 京 都 府 | 川本 彦次 | 谷 正文 | 新田富美子 | 平形いせ子 | 松本 孝子 | 齊藤 幸江 | 坂本美枝子 | 鈴木梅太郎 | 静岡 県 | 飯田たつ子 | 市川 市郎 | 宮城 県 | 相馬 ツキ | 高橋とし子 | 佐竹 エス | 佐藤 宗丕 | 齊藤耕太郎 | 吉田 綾 | 鳥本みさを | 山田 八重 | 北海道 | 伊藤 フジ | 岩川 あい | 東京 都 | 青木 利一 | 荒木 常子 | 山梨 県 | 黒川 正文 | 星野うま子 | 田村賢治郎 | 小笠原 広 | 菅井 光 | 飯島浩一老 | 井上 賀雄 | 石川 勲 | 三井 精義 | 長野 県 | 伊藤 正人 | 牛山 光子 | 青森 県 | 小笠原 広 | 菅井 光 | 飯島浩一老 | 井上 賀雄 | 石川 勲 | 三井 精義 | 長野 県 | 伊藤 正人 | 牛山 光子 | 田中 正治 | 塚原 ハナ | 石谷 典夫 | 内海 静枝 | 大石 潔 | 長野 県 | 伊藤 正人 | 牛山 光子 | 岩手 県 | 小杉 サヨ | 菅原 キイ | 黒川 誠 | 小島八重子 | 小山キミ子 | 高見沢およう | 宮下 礼子 | 宮城 県 | 相馬 ツキ | 高橋とし子 | 佐竹 エス | 佐藤 宗丕 | 齊藤耕太郎 | 吉田 綾 | 鳥本みさを | 山田 八重 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|----|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|----|------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-----|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|

